

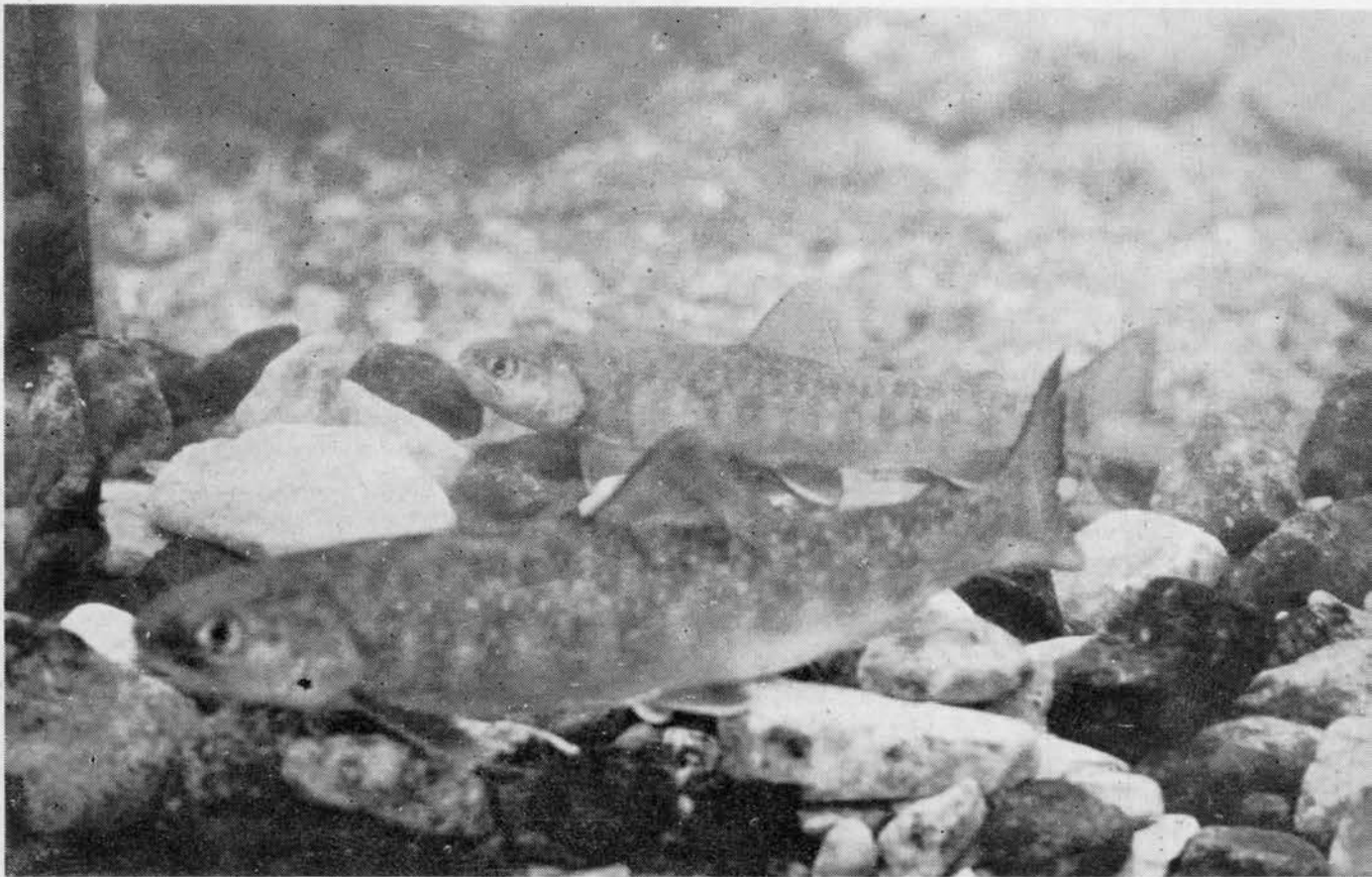
毎月1回25日発行

第3種郵便物認可(昭和35年7月26日) ①

山と博物館

第 7 卷 第 8 号

1962年8月25日



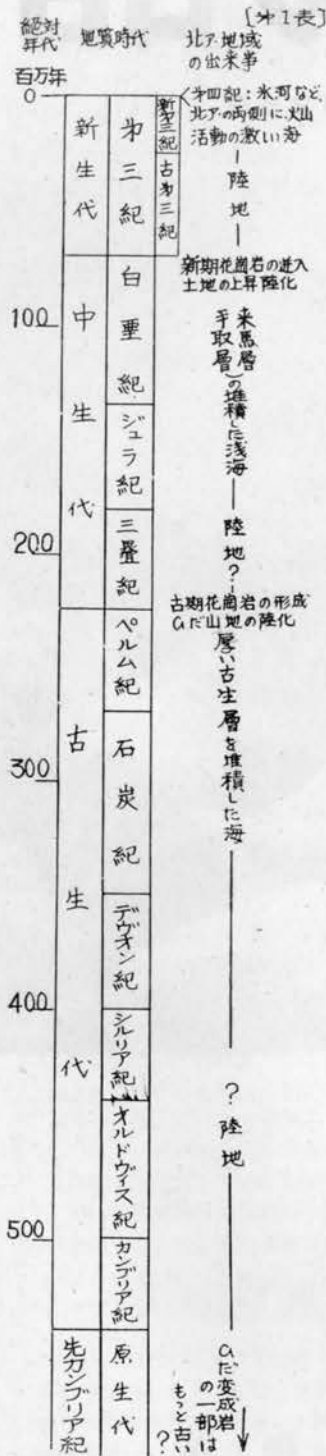
イ ワ ナ

撮 影 長 沢 武

大 町 山 岳 博 物 館

北アルプスの生い立ち

太田昌秀



私は6月に「山と博物館」の編集部から「地学的にみた黒部溪谷」という題で原稿を依頼されました。その後いろいろと調べてみたり、私の知恵で考えてみたりしましたが、黒部溪谷そのものについてはわかっていないことが多く、どうしてあの谷が深い谷になったのか、あの谷の花崗岩はどういう石なのかというような説明はとても難しいことです。そこでもう一まわり視野を広げて、北アルプス全体がどのような歴史を経て作り上げられてきたかを、大まかにたどってみることにしました。このような話は、日本全体とか、中部地方というような広い視野の中で、北アルプスの地学的意義を理解することで黒部溪谷や後立山連峰などの地域的な地質や岩石の話をするために是非必要な知識なのです。

私達が朝夕、その美しい姿を眺めて暮している高い山々が、どのような歴史を経て作り

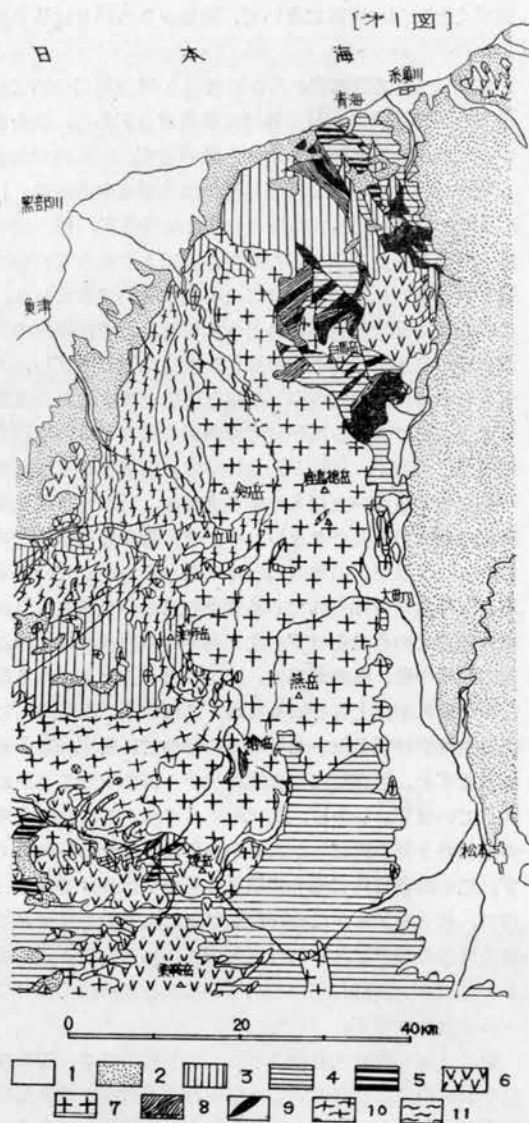
上げられてきたかというこの物語は、一つの町や、一つの地方の歴史の物語に比べると、はるかに壮大なものでそこには数億年にわたる永い地球の年令がぎざみこまれています。私達は、このような知識を持つことによって、更に一層私達の故郷の山々に対する理解と愛着を深め、自然から物事を学ぶ態度を養うことは、大切なことであると思います。

北アルプスのまわりにはどんな岩石があるか

第1表を参照しながら、第1図をみて下さい。まず気付くのは、北アルプス全体が広い花崗岩の山であるということです。この山脈の麓には、いろいろ種類のちがった岩石が分布しています。これらのうち、大昔の海底に堆積した泥や砂からできている岩石は化石を含んでいるので、地層ができた時代を知ることができます。北アルプス附近の地層を古い順からたどってみましょう。

- (1) 古生代中頃の地層 糸魚川西方の青海、焼岳の裏較阜高山の北などにくわすか分布する地層で、主に石灰岩からできており、その中からサンゴや放錘虫の化石が沢山みつかります。これらは今から3~4億年前に、この地域が海であったことをしめしています。
- (2) 古生代後期の地層 約2.3億年前から2.7億年前にできた地層で、泥や砂の固った岩が主で、松本西南方や白馬岳附近に、厚い地層として分布しています。この中からも、海に住んでいた動物の化石がみつかります。
- (3) 中生代後半期の地層 白馬岳から日本海岸までの地域や、立山連峰の西麓富山平野の山際に広く分布する地層で、粗い砂と火山灰などが積ってできた地層です。この中には、沢山の植物化石や薄い石炭層があって稀に浅い海に住む貝の化石がみつかります。これは、今から7000万年前から1.6億年前の間にできた堆積物の層です
- (4) 新第三紀の地層 松本盆地の東側や、富山平野のへりには、今から2500万年頃頃の海にたまった砂や火山灰熔岩などの地層が広く分布しています。この中には、海の貝と一緒に鯨の骨の化石がでてきます。
- (5) 第四紀の地層 松本盆地、四ヶ庄盆地や海岸平野を埋めている一番新しい時代の地層です。今から100万年前から今日まで、河川によって運び出された土砂や礫の層です。

このように時代がかわっている地層の外に、北アルプス地域には、火成岩や変成岩が広く分布しています。これらは、地下の深いところから熔けた岩漿として上昇してきたものや、砂や泥が地下深部に押しこまれて、別の岩石に変化したものなどです。ですから、これらの岩石



北アルプス地域の地質略図

1, 第四紀堆積物, 2, 新第三紀の地層, 3, 中生代後半期の地層, 4, 古生代後期の地層, 5, 古生代中頃の地層, 6, 第四紀の新しい火山岩, 7, 新しい花崗岩(中生代末) 8, 結晶片岩, 9, 蛇紋岩, 10, 古い花崗岩(古生代末) 11, ひだ変成岩

ができた時期には、地表では激しい変動が起り、大山脈ができたり、火山が爆発したりして、すさまじい時代であったと考えられます。第1図の中のこれらの岩石を、古い順にたどってみましょう。

(1) ひだ変成岩および古い花崗岩 北アルプス西半から岐阜県北部に広く分布し、変成岩と花崗岩のいりまじったもので、古生代末にでき上ったと考えられていま

す。このうち、ひだ変成岩の一部は5億年以上も前のものと考えられており、日本列島の中では最も古い岩石の一つとされています。

(2) 蛇紋岩および結晶片岩 蛇紋岩は八方山を作っているのと同じ岩石で、地下深くから割目に沿って上ってきた岩石です。結晶片岩は、板のように薄く割れる岩石で強い圧力をうけながら岩石が変化させられてできます。これらの岩石は、青海—白馬岳—槍ヶ岳—焼岳の裏などに分布し、ちょうどひだ変成や古い花崗岩の東のふちに当たっています。

(3) 新しい花崗岩とそれに伴う岩石 北アルプスの大部分を占め、私達が高瀬川などでみる白い大きな礫はみんなこの岩石です。この花崗岩(みかげ石)は、前のべた中生代の地層を貫いているので、それより後でできたものと考えられ、大体白亜紀の末(約9000万年前)に形成されたものです。

(4) 新しい火山岩 北アルプスは、乗鞍火山帯の中に入りますので、立山、焼岳、乗鞍などの新しい火山が噴出しています。これらは、1000万年位前から現在までの間に熔岩を流し出した山々です。

このように、北アルプスに現在分布している岩石を、ひとわり眺めまわしてみると、海の底でできた岩石やあるいは地下深くでできたものが、その後、土地が隆起したので上のものが次第に削りとられ、内部にあったものが地表にあらわれているのだ、ということがわかります。また、この地域は、大昔からずっと山であったのではなく、何度か海になったり陸になったりしたらしいこともわかります。では、次に、その永い北アルプスの歴史をたどってみましょう。

北アルプス地域の発展の歴史

上にのべたような岩石や地層の性質をたどってゆくと北アルプスをとりまく地域がどのような歴史をたどってきたかがわかります。まずはじめに、一気に古い時へ逆もどりして、それから次第に新しい時代へと発展のあとをたどってみましょう。

古生代後半(4~2.5億前) この頃の海と陸の分布は、大まかにしかわかっていませんが、この地域の大部分が海であったと思われる。ひだ変成岩の地域は陸であったかも知れません。この海には、今の琉球などのように、厚いサンゴ礁が発達し、放錘虫が生活していました。古生代の末近くなると、ひだ変成岩の地域の地下に、沢山の花崗岩(古い花崗岩)が上昇してきて、そのため、北アルプス西半以西は広い陸地となり、海は東へ押しやられました。この時の海と陸の境は、青海—槍ヶ岳—焼岳の裏を結ぶ線の近くにあったと考えられ、北アルプスは、古生代末には、ちょうど波打際であったわけです。この時、上昇した陸地と海との境は、地下に非常に歪の強い部分ができ、そこに蛇紋岩が進入したり、結

晶片岩ができたりしました。西方の陸地からは、沢山の砂や泥が運び出されて、今の美濃地方や、中央アルプス地域にあった海に堆積しました。

中生代(2.5億～9000万年前)には 中生代前半の時代の堆積物は、この地方には分布していないので、確かなことはわかりませんが、どうも海ではなかったと思われます。この時期には、古生代末に海だった地域(美濃-中央アルプス)に大山脈ができ、そのため、海は更に東の太平洋岸に押しやられました(その頃、多分太平洋はなかったかも知れません)

中生代中頃になると、北アルプス地域は浅い海に覆われるようになります。この海には、アンモン貝などが住み、岸边には沢山のシダ植物が茂り、小型の恐竜などが散歩していました。これらはみんな化石になってでできます。この時代の海は比較的浅い海で、小規模ないくつかの海にわかれており、地層はあまり厚く堆積しませんでした。

この時代の末になると、急に激しい火山活動が日本一帯に起って来て、それに引き続いて大規模な花崗岩(新しい花崗岩)が地下に押し上って来ました。この岩石は地表に直接噴出したのではなく、中生層の下にもぐりこんで固ったのですが、今は上の上のっていた地層がけずりとられてしまったので、地表に現れています。現在でも薬師岳や爺ヶ岳、蓮華岳の頂上附近に、けずり残された中生層がのこっています。この新しい花崗岩が進入すると、土地は著しく押し上げられて陸地となりました。

この時代には、北アルプス地域ばかりではなく、美濃高原や紀伊半島の熊野高原、中国地方の広い花崗岩地域なども形成され、日本列島がはげしい変動にみまわれた時代です。

また、日本ばかりではなく、中国、満州、朝鮮、オーック海岸の東シベリア地域などにも、沢山のこの時代の花崗岩がみられます。すなわち、中生代の末という時代は、太平洋の西岸地帯に広い大変動が起った時代なのです。

第三紀(7000万年前から100万年前まで) この時代の前半は、中生代末の花崗岩進入にひきつづいて上昇を続け、比較的安定した時代で、北海道、常盤、北九州などの炭田はみんなこの時代にできました。

第三紀の後半(2500万年前から100万年前まで)は新第三紀とよばれ、この頃になると糸魚川～松本を結ぶ線の東側や富山盆地が急に沈んで、海が再び陸地へ侵入してきました。この海では海底火山の活動が激しく、ちょうど明神礁のような爆発が盛んに起ったと考えられます。この海は、糸魚川-松本-諏訪-富士川流域を経て静岡で太平洋とつながっており、この海峡を鯨が悠々と泳いでいたのです。この時期には、北アルプスの一部が海面上に頭を出していたと考えられます。新第三紀が終りに

近すくと、海は次第に退いて、陸地がひろがりはじめました。

第四紀(100万年前から今日まで) 第四紀については信大の小林国夫先生が世界的な権威者ですから、機会を作ってお話を聞かれたらよいと思います。私達がたどってきた北アルプスの数億年にわたる歴史の中では、100万年という年月はつい最近のことなのです。第一表では、第四紀がわずか一本の線の太さにもあたらないので第2表に第四紀だけのできごとを別に書いてみました。この時代は非常に短いけれども大切な期間で、現在の日本列島の原形や、山や谷の形を決定した時代ですし、人類もこの時代の自然の中で試練と恩恵をうけながら成長してきたのです。したがって第四紀の研究では、地質学、地形学、人類学、気候学、生物学などと考古学までもが一緒に協力しないと何もわかりません。日本でも最近第四紀の研究が進んできましたが、まだ海岸地方のことがわかっていなくて、山地のことはほとんどわかっていません。山岳地帯で知られている数少ないことの中の1つは氷河地形ということです。北アルプスの山々には、特に立山連峯や槍、穂高連峯に、沢山のカルとよばれる盆状のくぼみが頂上近くにみられ、これらは、氷河時代に山岳氷河がけずりとった跡だといわれています。第2表をみますと、第四紀には氷河時代が4回あったことがわかっています。しかし、北アルプスでは、これらのうちの最後の2回の時にしか氷河ができなかったらしいのです。この時期は特に他の時期より寒かったわけではないので、北アルプスがこの時期になってようやく氷河ができるほどの高さになったのだと考えられています。つまり、北アルプスは、第四紀になってどんどん高くなりつづいたわけなのです。

新第三紀の海底火山岩の層は、立山連峯では、2000m位の標高のところのっています。ですから、新第三紀中頃に比べると、北アルプスは少なくとも2000mは高くなっているわけです。

北アルプスの頂上部のまわりには、2200～2300m附近に平らな部分が残っています。梅池の台地、八方尾根の平坦面、五色原、黒部源流の雲の平などがそれです。また、北アルプスの峯々は、大体2800～2900mの高さで並んでいます。これらのことは、これらの面がかなり平坦な準平原であったことを示唆します。その後の激しい土地の隆起で、谷はいよいよ深く刻みこまれていったのでしょう。黒部川なども、これだけが南北に流れるということが大体変なことです。この谷は、古い準平原だった時代に南北性の流路をもっていて、土地が上昇してもそれに負けずに岩石を削り、谷を深めていったのでしょう。このような谷のことを先行性の谷といえます。山清路附近の犀川もこのよい例です。

氷河期の最後の時期頃、信州に広く分布する赤土の層(ローム層)ができたと考えられています。私達は今で

[表2表]

地質時代	絶対年代	氷期区分	古気候	北の氷期	北石	文化区分(旧)	生業区分(古・新)
沖積世	0	後氷期	現在より	北石	北石	古新世(AD200-300)	新石器時代 新石器時代
	5000		温 暖			縄文時代前期	
洪積世	10000	前氷期 (または ワイルム 氷期)	温	北石	北石	縄文時代早期 (細石器文化)	旧石器時代 後期
	20000		温			旧石器時代 岩屑文化	
洪積世	5-50000	前氷期 (オックス フォード 氷期)	温	北石	北石	旧石器時代 中期	旧石器時代 中期
	150000		暖			ナウマン象	
洪積世	約240000	前氷期 (オックス フォード 氷期)	暖	北石	北石	ナウマン象	旧石器時代 前期
	約520000		暖			マンモス象	
洪積世	約450000	前氷期 (オックス フォード 氷期)	暖	北石	北石	マンモス象	旧石器時代 前期
	約550000		暖			マンモス象	
洪積世	約280000	前氷期 (オックス フォード 氷期)	暖	北石	北石	マンモス象	旧石器時代 前期
	約600000		暖			マンモス象	
洪積世	約2000000	前氷期	暖	北石	北石	マンモス象	旧石器時代 前期

も上原や神戸原のかなり上の方などに、縄文式の土器を

使った人々の遺跡があります。私には、これらの人々が
 どのような人だったのか全くわかりませんが、みなさんも
 機会があったら、自分の家の近くのこのような場所を注
 意深く観察してみてください。泉小太郎の伝説の話を、お
 じいさんやおばあさんから聞かれた人もあるかと思いま
 す。あの話に出てくるように、松本盆地も、いつかの昔
 には湖のようになっていて、昔の人々はその湖のふちで
 暮っていたのかも知れません。また機会がありましたら
 泉小太郎の話の確からしさを科学的なデータから考え
 てみたいとも思っています。

第四紀の話は、さっぱりとりとめのないことになりま
 したが、私もこれからいろいろ勉強してみたいと思いま
 す。この次にはもっと面白い話を書けるように、努力し
 たいと思っています。

(理学博士 北海道大学地質教室)

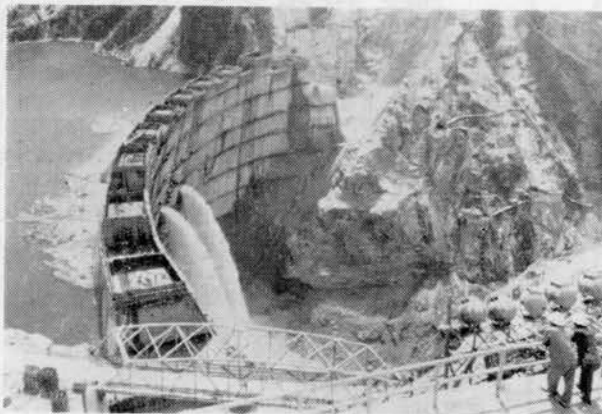
御質問などは下記へ、

札幌市北8条西6丁目、北大、理学部、地質教室

太田昌秀

変りゆく黒部紹介

武田陸男



5, 6年前までの黒部川は秘境の地として知られ、こ
 こを訪れる登山者の数も極く少なかったが、関西電力の
 黒部川第4水力発電所のダム建設工事などにより、黒部
 川は次第にその地図をぬりかえようとしている。

数年前までは立山東面の御前沢などへ入る人はほとん
 どなく、ほんの一部の岳人のみであった。しかもその入
 山路はきわめて長く、富山県側、長野県側どちらにしま
 ても最低3日はかかったのである。ダム工事がはじまると最
 初は立山ルートと云われる一ノ越から立山東一ノ越を越
 えてタンボ沢への木馬道が作られ、このルート一本のみ

で建設資材などが運び込まれたのであるが、立山の
 ポッカなどの苦労は大変なものであった。

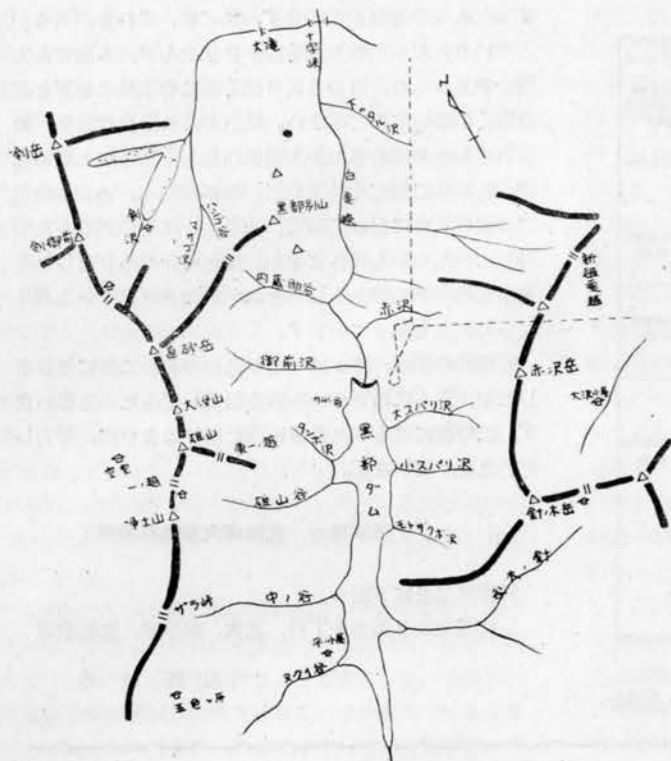
そして33年ようやく待望の大町ルートのトンネル
 も開け、信州側からの黒部が非常に近くなった。工
 事が進むと同時に黒部は変わって行った。

えん堤工事も今年で終了しようとしている、来年
 はもっと多くの人々が訪れるだろう、何故ならば38
 年度からは一般に解放されるからである。登山バス
 も遠からずダムまで運行される様になるであろう。
 またこゝを基地とした立山、剣岳の登山、下郷下へ
 の探望、また上郷下の開発と赤牛、水晶岳から槍が
 岳への登山路など次第に開発されて来るのではない
 か?

立山へのルート

大町から、立山へのルートは今までは大糸線から、糸
 魚川、富山を経て、弥陀ヶ原から登るルートと、針ノ木
 峠越えをして平の小屋、五色ヶ原、浄土山を経て登るコ
 ーストがあるが、いずれも2日間もかゝって登ったのであ
 るが、ダム完成後はタンボ沢から登るとわずか6, 7時
 間で登ることが出来る。

登り口はダム左岸のサムイ谷のすぐ上流からである道
 は木馬道のあとで、ゆるやかな登りが続く、路巾も1m
 位あって割合よい道である。途中こわれかゝった橋がい



くつかあるが、横手に新しくふまれた道があるので、これをたどればよい。タンボ高地に出ると森林帯もぬけてお花畑である。登り口から4時間位で東一の越への最後のジグザグの急坂であるが、尾根筋へ出ると後立山連峰や表、裏銀座の山々、槍ヶ岳などの眺望もすばらしく、今までの疲れも吹飛んでしまう。東一ノ越からは立山の南斜面をトラバースして一ノ越に出る。雄山までは30分位である。健脚の人なら日帰りも出来るというコースである。

現在は工事関係の人達がわずかに登っているのにすぎないので、道もあまりよくないが今後はもっと手入れをされるであろうし、立山を貫くトンネルがタンボ沢にぬけるという計画もあり、ダムを中心に第2の上高地ともなることだろうが、自然を満喫するためにはより人工的なものを少なく願いたい。

下廊下へ

御前沢から黒部川の左岸側に関電の歩道がつけられている、以前は岩壁上に棧道がつけられていたが、毎年雪の為にこわされてしまうので、昨年からの岩壁をくりぬいて作られたので大分よくなった。しかしまだ巾のせまい難場もあるので、大きいリュックの場合、よく注意しなければならぬ。

内蔵助沢(クラノスケ)より下流から両岸が切り立った、いわゆる廊下となるが、白竜峡、十字峡、S字峡とつきつぎに現われてくる景観はすばらしく、まさに「黒部」ならではの美観である。ダムから仙人まで約6時間

で出ることが出来る。

平小屋から東沢、赤牛岳へ

ダムから平小屋までは、左岸側に貯水面にそって1m位の良い道が作られている、平小屋から東沢までは4、5年前測量用の道がつけられたが現在では余り良いとは思われない。ダム完成後は左岸船付場から、平小屋あるいは東沢までの遊覧航路ができるそうである東沢から赤牛へのコースも未開であるが、立山方面から槍ヶ岳方面への最短コースとして開発される様な気がする。

剣岳へのコース

これは現在作られていないコースであるがダム完成後は開発されても良いコースと思う。内蔵助沢を遡ると内蔵助平があるが、四方山に囲まれた小さな盆地のような所である。

黒部別山との鞍部がハシゴ谷乗越である。ここから剣沢へ下るコースが剣岳への最短コースとして考えられる。

赤牛岳から槍ヶ岳へのコース、内蔵助平から剣岳へのコースは現在は開発されていないが今後開発されても良いコースと思われたので変りつゝある黒部として紹介した。

(大町山の会)

北ア山麓の五日間

＝第六回山の自然科学教室＝

第六回を迎えた恒例の「山の自然科学教室」は、今年も本館と東京教育大学野外研究同好会の提携の下に、都内公立中学校8校の生徒178名の参加を得て、7月23日から5日間にわたって、行なわれた。

参加中学校は、阿佐ヶ谷中・鈴ヶ森中・九段中・和泉中・杉森中・高円寺中・日本橋中・豊玉中の8校、付添教師、野外研の教育大生、本館関係者等総勢250名に及ぶ大部隊となった。

7月23日、朝6時20分、本隊は新宿駅を出発、午後3時27分大町駅に到着、四台の大型バスに分乗市民会館に向い、こゝで開講式を行い各班徒歩で市内の旅館に入って分宿。

翌24日は、朝、山岳博物館を見学、居谷里湿原入口までバスを利用、徒歩で湿原を観察し、再びバスで白馬山麓の細野部落へ向い、こゝで各班毎に分宿

7月25日、この日は予定によれば徒歩で黒菱小屋まで登るはずであったが、数日前、黒菱小屋を利用した大町市内の中学校から食中毒患者が発生したために、急遽予定を変更、往復ケーブルを利用して八方山へ日帰り登山を行った。

続いて26日は白馬山麓二股方面と馬止め方面の2コースに別れて採集会。夜はキャンプファイヤー。翌27日も前日とコースを交代して採集会を行い、午後6時18分四ッ谷発の列車に乗車、無事晴天に恵まれて全日程を終了した。

集団登山の時間記録について (1)

大町高校山岳部

登山の時間記録はガイドブック、パンフレットなどに多く紹介されているが、集団登山記録は記されていない。集団登山をされる方のために、昭和37年度大町高校集団登山の実際の記録を掲載した。なお年令、天候などによって多少の違いはあることと思うが、集団登山をされる方の一助となれば幸いである。

針ノ木岳

- I 人員 職員 4人 OB 2人
生徒 男子 45名 女子 17名
- II 天候 7月13日 晴
7月14日 晴

III 時間記録

第一日目(7月13日)	第二日目(7月14日)
大町発 7.40	針ノ木小屋発 7.00
下扇沢着 8.15	小休止 7.15~7.20
〃 発 8.30	〃 7.45~7.50
小休止(変電所)9.20~9.30	針ノ木岳着 8.45
大沢小屋着 10.30	〃 発 9.45
〃 発 11.00	小休止 10.30~10.35
雪溪取り付き11.20~11.30	針ノ木小屋着 11.15
小休止 11.50~11.55	〃 発 12.15
昼食 12.10~12.35	小休止 1.05~1.10
小休止 1.20~1.30	〃 2.00~2.05
針ノ木小屋着 1.55	大沢小屋着 2.30
〃 発 3.00	〃 発 2.50
小休止 3.15~3.20	小休止 3.45~3.50
〃 3.40~3.45	下扇沢着 4.10
蓮華岳着 3.55	〃 発 4.30
〃 発 4.15	大町駅着 5.00
小休止 4.30~4.40	

III その他

女子 1人 大沢小屋泊り 疲労のため

鹿島~針ノ木縦走

- I 人員 職員 3人 OB 2人
生徒 54人(男子のみ)
- II 天候 第一日目(7月13日)
午前中は曇り午後は雨が降ったりやんだり
第二日目(7月14日) 快晴
第三日目(7月15日) 晴
- III 行動時間記録
- | 7月13日 | 7月14日 | 7月15日 |
|-----------|------------|------------|
| 大町発 7.35 | 種池小屋発 7.02 | 針ノ木小屋発7.30 |
| 大谷原着 8.15 | 岩小屋沢岳着8.30 | 蓮華岳着 8.30 |

発 8.30	新越乗越 8.53	発 9.35
西俣着 9.50	鳴沢岳着 9.40	針ノ木小屋着11.00
発 10.00	発 9.50	発12.20
高千穂着 12.00	赤沢岳着 10.37	雪溪の下着 1.35
発 12.25	スバリ岳着 12.43	下扇沢着 4.10
稜線着 1.40	針ノ木岳着 1.25	発 4.45
発 1.50	発 2.15	大町駅着 5.07
鹿島頂上着3.20	針ノ木小屋着3.45	発3.25
稜線着 4.28		
発 4.40		
種池小屋着6.00		

III その他

種池小屋で1人熱を39.6度出して第二日目に扇沢に先生1人、OB1人、サブリーダー1人が付き添って下る。
サブリーダーとOBはその足で再び扇沢より針ノ小屋まで来る。

鹿島槍岳

- I 人員 職員 2人 OB 2人
生徒 49人(男子のみ)
- II 天候 7月14日 曇り
7月15日 晴後雨後曇り

III 行動時間記録

第一日(7月14日)	第二日(7月15日)
大町発 7.50	冷小屋発 6.45
大谷原着 8.25	布引着 7.45
西俣着 9.53	発 8.00
発 10.05	鹿島南峰着 8.35
高千穂平着 12.00	発 9.00
発 12.45	布引着 9.32
稜線着 2.10	冷小屋着 10.23
発 2.25	発 12.00
爺岳頂上着 3.20	高千穂着 1.00
発 3.40	発 1.05
冷小屋着 4.50	西俣着 2.30
	発 2.52
	大谷原着 3.50
	発 4.00
	大町着 4.30

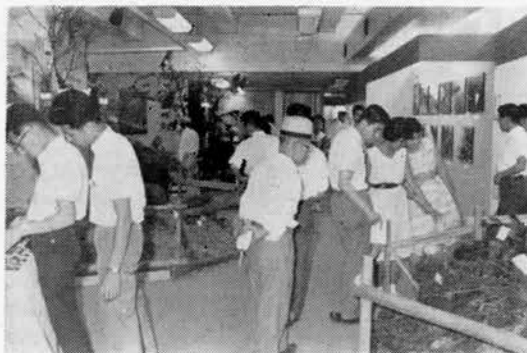
III その他

落伍者なし

(唐松、白馬、燕槍縦走は次号)

博物館だより

- 7月30～8月7日 東京白木屋で開催された日本アルプス動物展(本館出品300点)は好評裏に終る(写真右上)
- 8月2～5日 立教大学博物館学実習は本館で行なわれ観覧者に対しても調査が行なわれ近くその結果がまとまる。
- 8月11～18日 南アルプス植物調査
- 8月11～18日 乗鞍岳植生調査に参加
- 8月12日 日赤奉仕団は博物館庭の草刈と掃除
- 8月20～29日 自然保護協会主催南アルプス南部植物調査に参加
- 8月17～18日 第4回国立公園大会において、自然保護と自然利用に関する功により長野県知事表彰を受け、皇太子殿下及び同妃殿下御招待のお茶の席上はげましのお言葉をいただく。(写真右下)
- 8月25～27日 国体登山部門県予選に技術審査員派遣(白馬岳)



夏山の登山数は、温度計の上り下りに比例するようだが、暑さも峠を越し、コオロギの声を聞くようになった現在でも、まだまだ駅頭や車内に大きなルックを持った人々を見るのは、10年前だったら一寸考えもつかないことで、正に登山ブームという言葉を思わせます。そしてこのブームは記録が年ごとに更新されて行く状態で、近頃本屋を覗いてみても山に関係した本の多いこと驚くばかりです。

ブームといえば一時的な景気で、長続きしない、はやりものをいう訳だが、どうも山に関する限りこのブームは違うようである。

時代が進み、社会の資本主義化が進むにつれ、人間生活は生活の糧を得るための奴隷化し、味けないものとなる。しかも人混みと騒音、ビルの林立、全てが異状に氾濫し合う都会に暮らす者にとって、大自然が魅力でない筈はない。

山は美しく、空気も澄んで、展望は良く、自然は雄大です。こうした中であって博物館は益々遠ざかろうとする人間と自然を近ずける縁結びの神であり、山岳博物館の運動は自然に帰る運動といえるでしょう。

私達は博物館といえば、ともしれば骨董的展示を連想するのですが、こういう人には今の学校教育の社会科という科目がピンとこないのです。

九月に入ればよいよ秋です。私は大町と山岳博物館との関係は、人間と読書の関係のようなものではないかと思えます。「ツンドク」というのがあります。これは収集した資料を紛失しないようただ保管、展示しておくだけの博物館です。「セイドク」これは観覧者本意に考え、季節による展示変えや展示のための資料の収集、調査などまで行う博物館でしょう。「ミドク」こうなってくると博物館運動は、建物の殻を破って大衆と共にある形となります。それは自然を知る運動であり自然に帰る運動です。皆が自然を愛し、自然を科学する運動ともいえます。その本は豪華本でなくても又特殊な専門書でなくてもいいでしょう。味い、そして味ったよろこびにしたり、その味を自分のものにし、生活に生かすことができたならば、これはたとえ他所目にはつまらないガリ版刷りの文集であってもよいと思えます。

幸い大町山岳博物館の姿は、さしづめガリ版刷りの本ではあるが、味読の価値があり、又味読されている本といえるでしょう。館外活動は博物館の中ではおそらく全国一ではないでしょうか。私はこの方面にくわしくないが何

私は思う

かそんな気がしてならない。

(長 沢 武)

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料300円(郵送料とも)を現金書留または郵便為替、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第7巻第8号 1962年8月25日発行
発行所 長野県大町市TEL(大町)211
大町山岳博物館
印刷所 大町市上仲町
信州印刷大町工場